

1：ニーチェのボランティア批判

2011 年の東日本大震災以降、ボランティアという言葉をよく耳にするようになった。私の通う大学構内にも近隣の炊き出しから、海外の土木工事まで様々なボランティア募集広告を目にする。また国全体としてもボランティア活動を推奨する方針にあり、文部科学省が東日本大震災での学生のボランティア活動を単位として認めることが可能との通知を大学に出したことなどがその例である。しかし、こうしたボランティアというものに対してドイツの哲学者であったニーチェは否定的な意見を述べている。彼は『道徳の系譜』において以下のように述べている。「ルサンチマンの人間どもの種族は、いつには必ず、どんな貴族的人間の種族よりも伶俐になる。」「かれら（ルサンチマン的な人間）はいったい何を望んでいるのか？せめてなりと正義、愛、知恵、優越をひけらかすこと—これこそが、これら〈最下等者〉どもの、これら〈病人〉どもの野心なのだ！」「『われらだけが善人だ、義人だ、われわれだけが〈善意の人間だ〉』とかれらは称する。」⁽¹⁾ ここで言うルサンチマン的な人間とは、怨恨、恨みの感情に支配された弱者のことであり、ニーチェはこういった人々が自己の肯定の為にとる手段こそが他人に尽くすことであるとしている。

本当にニーチェの言う通りなのだろうか。確かにボランティア活動をする為の動機について考えると自己満足の為という意見が挙がるが、それだけの理由から多くの人がボランティア活動に参加しているのだろうか。総務省統計局によると、日本国内では平成 12 年 10 月から 13 年 10 月の一年間に何らかのボランティア活動を行った人は 3263 万 4 千人であり、その数は現在も増加傾向にある。彼らはただ偽善的な精神でいて、自分の時間を無償の活動に割いているのだろうか。私にはそうは思えない。では、自己満足以外のどのような理由から我々はボランティア活動に参加するのだろうか。ノーベル平和賞受賞者であり、世界のもっとも貧しい人々を助けた人物として今なお愛されるマザーテレサの人生と信仰から、新たな理由を探ってみることにした。

2：マザーテレサの人生

まずはマザーテレサという人物がどのような人生を辿った末に、一生を他人の為に尽くすことにしたのか、概略を述べていきたい。1910 年、マザーテレサはユーゴスラヴィアのスコピエに生まれた。三人兄弟の末っ子であり、両親は敬虔なキリスト教徒であった。その四年後に第一次世界大戦がはじまり、1919 年には実業家でアルバニア独立運動の闘士であった父が急死した。こういった背景から幼少期より神に仕えることを志していた彼女は、1928 年にアイルランドのロレット修道会に入信し、家族のもとを去る。翌年には修道女となった。1931 年、修道女としてダーズリンのロレット修道会設立の学校で教鞭をとっていた彼女は、その際初めて貧困や苦しみに喘ぐ人々を目の当たりにする。転機が訪れたのは 1946 年、マザーテレサが 36 歳の時であった。暴動により大混乱に陥るカルカッタで彼女

は「貧しい人々の中にまじって、貧しい人々のために尽くしなさい」という神の御告げを聞く。後にマザーテレサはこれを「召出しの中の召出し」と表現している。これを機に一念発起した彼女はカルカッタ大司教からの許可を得て 1948 年に修道院を出てカルカッタのスラム街へと身を投じる。独自に「神の愛の宣教者会」を設立し、そこから〈死を待つ人の家〉や〈孤児の家〉、ハンセン病患者のための〈平和の村〉を作るなどの活動を行い、貧しい人々に献身していく。徐々にマザーテレサの活動は世界中に認められるようになり、1979 年にノーベル平和賞を受賞する。その後も精力的に活動を続けるも、1997 年ついに 87 年の人生に幕を下ろした。彼女の葬儀はインド政府によって国葬として扱われ、世界中の人々に見守られた。

3：マザーテレサの信仰

このような人生を辿ったマザーテレサの考えは、資料を見る限り常に一貫している。即ち、キリスト教で言うところの無償の愛である。それこそが彼女の活動の原動力であり、動機であった。また、1982 年の来日公演で以下のように語っている。「(前略) 人間は神の美しいイメージだからです。そして、私があのお方の男の人、あのお方の女の人、あの子供にすることはなんでも、あのお方にしているのです。キリストに。すばらしいではありませんか。だからこそ、私たちのシスターやブラザーたちは、カルカッタやここだけでなく、メルボルンやどこにいても、貧しいなかのもっとも貧しい人に仕えるうちに、愛の行いの中で、彼らのすべてを神の愛のために捧げる決心をしています。」⁽²⁾つまりマザーテレサにとって、他人に尽くすことはすべて神への信仰を表すための行為なのである。一般的に誰かを愛するということは特定の個人を特別扱いすることである。それ故無差別的な愛や無償の愛の実現はひどく困難なことであるが、彼女は命あるすべてのものにキリストが宿っていると考えることでそれを可能にしていたのである。このことから考えると、マザーテレサという人間は慈善活動家というよりむしろ、どこまでも熱心な宗教家であったという方が望ましいと言える。

では、マザーテレサの信仰には一点の曇りも無かったのだろうか。前述のとおり、彼女は一生を神に捧げており、略歴を一見すると彼女の信仰心に疑いは無かったかのように思われる。しかし彼女の死後、彼女の交わした手紙を集めて作成された『Come be my light』には彼女の信仰に対する不安が綴られている。例えば、1957 年マザーテレサは当時彼女の懺悔を聞く立場にあったベリエール大司教への手紙で以下のような告白をしている。「私の魂の中には、あまりにも多くの矛盾があります。神への深い思慕の情——神との触れ合いを渴望するその思いが、繰り返し私に苦しみを与えるのです。私は神から求められてはいません。神から拒絶され、虚しく、信仰もなく、愛もなく、熱意もありません。私の魂には何ひとつ魅力あるものがありません。天国は何の意味もありません。それは私には空虚な場所のようにしか感じられません。」「私のために祈ってください。私がイエスにずっと微笑んでいられるように祈ってください。私は“神がない”という地獄の苦悩を少し理解しています。しかし、それを表現する言葉が見つかりません。」⁽³⁾ この手紙からわかるように、彼女は神の不在に苦悩していたのである。人生をかけて神に信仰を捧げる一方で、神の存在に疑いの念も抱いていたのである。

このように神の存在の有無に苦悩したという点では、ニーチェに対しても同様のことが

言える。しかし神の不在に悩んだ末、最終的にニーチェは、唯一実在の世界はこの現象界のみであるとして神を否定した。その点でマザーテレサとは対照的である。またその際、宗教はルサンチマン的な人間がおのれの苦痛に対してとる「慰め的手段」の一つに過ぎないとした。『権力への意志』の中でニーチェはキリスト教を以下のように批判している。「我々はキリスト教のどこを攻撃するか？キリスト教が強者たちを破壊させようとしていること、彼らの不調の時や疲労につけこみ、彼らの気力をそぎ、彼らの誇るべき安全感を不安と良心の呵責へと逆転させようとしているということである。」⁽⁴⁾ ニーチェにとって神の存在は、彼の思想の根幹を成すものであり、同時に超えるべきものでもあったと思われる。

一方、ニーチェと同じく神の不在に苦悩したマザーテレサであるが、彼女の歩んだ人生はニーチェと異なるものであった。彼女は思想家ではなかった為に、著作から彼女の考えを知ることはできない。しかし、おそらく彼女は神の存在を肯定する為に自身の活動を続けたのではないかと思われる。神の愛の宣教者会の一員としてマザーテレサの傍で過ごしたラングフォード神父はこのことについて著書の中で、「神の存在を否定する漆黒を彼女は自分の魂に集め、光の中に闇を沈めて、愛に満ち溢れさせた。」⁽⁵⁾ と表現している。彼によると神の不在による信仰の苦悩は神からの試練（チャレンジ）であり、彼女は恵みと勇気をもってそれを乗り越えたのだと言う。即ち、マザーテレサにとって他人への献身は神への信仰行為であると同時に、神の存在を肯定するための手段でもあったのである。

4：マザーテレサの活動をボランティアと呼べるのか

以上のような精神に基づくマザーテレサの活動を、ボランティアと呼ぶことはできるのだろうか。それとも、シュヴァイツァーらがしたような、古くから続くカトリックの宗教活動の一つに過ぎないと言い切ってしまった方が適切ではないのだろうか。私は、たとえ宗教の精神が介入していたとしても、彼女の活動は一つのボランティアであったと考える。そもそもボランティアの定義とは何かについて、ブリタニカ国際大百科事典には以下のように記されている。「みずから進んでする人の意。アメリカでは生活改善や社会福祉、教育、文化、町づくりなどの分野で自発性、無償性、奉仕性を原則に無償で奉仕してくれる篤志家を指す場合が多かった。しかし最近ではこれを広く解し、リサイクル活動や環境保全、文化、生涯学習など市民社会全般にかかわる奉仕活動としてとらえ直す空気が強まっている。ただ、行政の代替機能を期待する風潮もあり、行政とボランティアの役割分担はどうあるべきか議論を詰める段階にある。なお全国社会福祉議会によれば、日本のボランティア人口のほとんどがボランティア関係諸団体に属している。」⁽⁶⁾ つまり、本来は社会事業に無償で自発的に参加する奉仕活動家のことを指すが、現在ではその意義が変動しつつあるようである。故に私は、見返りを求めず誰かのために行う行為すべてをボランティア活動であると仮定することにした。その場合、マザーテレサの活動を一つのボランティア活動と位置付けることができる。

また、マザーテレサが宗教に関して寛容であったことも彼女の活動を一介の宗教活動に過ぎないと言い切れない理由の一つである。確かに本音として彼女はより多くの人をキリストを愛し、愛されるようになることを望んでいた。しかし前述のとおり彼女の活動の主たる部分は他人に信仰を勧めることというよりむしろ、彼女自身の信仰確認にあった。ま

た、彼女にとって信仰は人からの勧めで行うものではなく、自分で探して求めるものであった。マザーテレサは、改宗は人知を超えた神の働きかけと招きがあって初めて成立すると考えており、自分が関与できるような範疇の問題ではないとしていたようである。故に異教徒の多いインドでも広く受け入れられ、ノーベル平和賞で世界的に認められるに至ったのではないかと思われる。

5：マザーテレサの推奨する身近な活動

では、マザーテレサは一般的な人々に対してどのように生きることを求めていたのだろうか。講演録を見る限り、彼女が一般に推奨していたことは家庭内での愛情の分かちあいである。彼女は終始貧しい人々の為に尽くしたが、彼女の思う貧しさは物理的なものだけでなく精神的なものも含まれていた。そして、特に生活が豊かな先進国ほどこうした精神的な貧しさが目立つことを指摘していた。ここで言う精神的貧困とは自分は誰からも必要とされていない、大切にされていない、愛されていないと思うことである。こうした孤独を無くすため、信仰の有無に関わらずまずは家族を愛することを、彼女は第一に挙げている。

一方で、金銭的支援に関しては常に否定的であった。「私はみなさまが豊富さからくださる物は、ほしくありません。私はみなさまに愛する喜びを分かちあってほしいのです。」⁽⁷⁾と発言しているように、彼女は精神的な部分を大切にしていた。故に富裕層による一時的な資金提供や、資金集めのための組織拡大に関してはあまり快く思わなかったようである。一度政治家に利用されてスキャンダルに巻き込まれたこともこのように考えることの一因である。

また、マザーテレサはより社会的で広範囲な活動を行うことについても積極的とは言えなかった。『ノーベル平和賞 90年の軌跡を受賞者群像』には以下のようなことが書かれている。「社会改革なくして、貧民はなくなる。『貴方の今していることは、外科手術が必要な患者に包帯をするだけだ』との批判に対して、『私たちは、単なるソーシャルワーカーとは違います。神の愛の運び屋です。神の愛と共に生きているだけです。それに、貧しい人が本当に苦しむのは、社会に見捨てられること。最も恐ろしい貧乏は“孤独”なのです』と彼女（マザーテレサ）は静かに答える。」⁽⁸⁾この点でマザーテレサも多くのキリスト教哲学者同様、人間というものに対して常に希望的観測を持っていたことが伺える。彼女はこうも言う。「私たちの今していることは、大海の一滴（しずく）にすぎない。」⁽⁹⁾。「いちばん大切なことは、彼ら（貧しい人々）に少しでも、喜びと平和と愛をもたらしてあげること。」⁽¹⁰⁾。即ち、彼女は我々に最初から大きな社会変革を起こすことを求めているのではなく、今自分に出来ることを喜んですることを望んでいたのである。

6：まとめと今後の活動に関して

ここまでマザーテレサの活動からボランティアについて考えてきた。そして、ボランティア活動はルサンチマン的な人間が自己肯定の為の手段として用いる行為であるというニーチェの考えに対し、それ以外の動機として、ボランティア活動が無差別にして無償の愛の追求、神の存在を肯定する為の手段であるという解答を得た。しかし上記のとおり、これはキリスト教の宗教観から来る精神である。では次に宗教的な精神だけがボランティア

活動を可能にするのかという疑問が生じる。この反例として私は、自分探しのための手段としてのボランティアを挙げる。ニーチェに言わせるとこれも自己満足に分類されるのかもしれないが、誰かと交流し彼らを救う中で社会や人間について学び、自身の生き方について、例えば善き生とは何かについて考えることは、自己嫌悪故の献身とは異なるように思われる。故に、自分探しもまたボランティア活動に参加する動機になり得ると考える。

また今回は何がボランティアであり何がボランティアでないか、ボランティア活動はどこまでが個人的なものであり、どこからが公的なものであるかという区分について曖昧にした。しかし、前述の辞書の引用の中にもあったように、このグローバル社会でボランティア活動がどのようなサービスを求められ、何を提供すべきなのか問われる段階になっている。今後のボランティア活動のあり方に関して、フィールドワークを含めより深い調査が必要である。特に実際にボランティア活動に従事する人々の意見を聞くことや、自身のボランティア活動への参加は必須であると思われる。そうした研究を経て、再度マザーテレサの活動に立ち返り、今回の調査で私が出した評価が妥当なものであったのか検討していきたい。

7：改訂を経て

このレポートの改訂中に、私は北海道大学国際本部主催の G セミにて、北海道大学の OB にして、現在は日本国際ボランティアセンター (JVC) スーダン現地代表を務める今井高樹氏の講演会を聞きに行く機会があった。その講演会にて今井氏は、会社員から NGO 団体现地代表に至るまでの経験や、実際に NGO 団体がどのように活動しているのかを語ってくれた。その中で最も印象的だったのは、NGO 団体や国連機関は基本的に人材や資源の派遣をする、いわば官僚的な仕事をする立場であり、実際に現地で活動するのは彼らによって雇われた現地人スタッフであるということだ。特に国連ではこうした傾向が強くみられ、国連職員は人助けに関する役人仕事をこなしているという印象の方が強いようだ。確かに職員が調整員となり、専門的な知識を持つ現地人を雇えば短期間に多岐に渡る活動を行うことが可能である。しかし個々人の生活やその中で生じる幸福は、地図上、数字上では計ることのできないものである。故に、現在の NGO 団体によるボランティア活動が本当にボランティアの定義の中で機能しているのか疑問に思い、功利的な組織化に伴うこうした弊害を避けるためにも、マザーテレサは広域に渡る組織的な活動を拒んだのだろうと考えた。

また講演会后、今井氏に個人的な質問として彼が海外でのボランティア活動を始めた動機を尋ねてみた。今井氏によると、その答えは自身の興味にあるという。最初は友人がしていたボランティア活動に興味を持ったことから始まり、その後海外での活動にも興味が出た為に、仕事を辞めて NGO 活動の世界へと入っていったようである。もちろん、興味だけがすべてではなく、その時々に応じて諸々の事情があったようだが、精神的な面から見ると、この興味という要素は欠かせないものであるように思われた。ここまで私はボランティア活動に対する動機に関して、自己肯定としての手段や神への献身の表れなど複雑な心の動きにのみ目を向けてきたが、実際には興味のような単純な心理についても考える必要があるのかもしれない。

【参考】

- ・ ジョセフ・ラングフォード、『マザーテレサの秘められた炎』。
- ・ ナヴィン・チャウラ、『マザーテレサ愛の軌跡』。
- ・ 土田将雄 監修、『宣教師マザーテレサの生涯 スコピエからカルカタへ』。
- ・ シャーロット・グレイ、『マザーテレサ』。
- ・ マザーテレサ、『生命あるすべてのものに』。
- ・ 小倉志祥教授還暦記念会編、『実存と倫理』。
- ・ 統計局ホームページ (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/topics/tps0301.htm>)。
- ・ スピリチュアリズム普及会 第一公式サイト マザーテレサの「心の闇」問題 (http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/sp_newsletter/spnl_backnumber/spnl-50/spnl-50-1.htm)。
- ・ 堤佳辰、『ノーベル平和賞 90年の軌跡を受賞者群像』。

【引用元】

- (1) フリードリッヒ・ニーチェ、『善悪の彼岸 道徳の系譜 ニーチェ全集Ⅱ』、1993、394頁。
- (2) マザーテレサ、『生命あるすべてのものに』、第一章「愛のはじまり」、21頁。1982年4月22日、東京・暁星学園におけるファミリー・ライフ協会主催の「生命の尊厳を考える国際会議」特別講演におけるマザーテレサの講演より。
- (3) スピリチュアリズム普及会 第一公式サイト マザーテレサの「心の闇」問題 (http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/sp_newsletter/spnl_backnumber/spnl-50/spnl-50-1.htm)。
- (4) 平木幸二郎、第四章「ニーチェの道徳批判——ルサンチマンの心理学」、『実存と倫理』、230頁。クレーナー版『権力への意思』（ニーチェ著）の引用より。
- (5) 『マザーテレサの秘められた炎』、ジョセフ・ラングフォード、第二部「闇の中に、光」、91頁。
- (6) 『ブリタニカ国際大百科事典』（電子版）。
- (7) マザーテレサ、『生命あるすべてのものに』、第一章「愛のはじまり」、15頁。
- (8) 堤佳辰、第八章「動乱の七〇年代！（1971～1980）民族、宗教、思想——反体制の力学」、(九) “カルカタの聖女”——マザー・テレサ（インド）、『ノーベル平和賞 90年の軌跡を受賞者群像』、399頁。
- (9) 同上、398頁。
- (10) マザーテレサ、『生命あるすべてのものに』、第三章「若い人びとへ——祈りと愛と奉仕と」、50頁。1982年4月23日、東京・上智大学におけるマザーテレサの講演より。